

○はなしだね

▲^{△△△△△△△△△△}黒田清輝伯のモデル物語

●此頃或る新聞紙は僕を引合に出して藝術家が社會の風儀を墮落させたとか何とか云ひ「白馬會の啞美人」さへ云々するに至たが是程馬鹿氣た事はない●彼のツルと云ふ女は我邦のモデルの元祖とも云ふべきで今から考へると人の運命は誠に果敢ないものだ明治二十六年僕が丁度佛蘭西から歸朝した頃の事當時は今と違つてモデルになる女などは中々無かつたので差詰め友人の山本芳翠君に頼むと程なくよこしたのが此啞女であつた●彼れは僕の歸朝前芳翠君が岩崎家の頼みで十二支の油繪を描く時既に其内の徳川風俗美人のモデルとなり芳翠君の筆をして一層の色彩を増させたものである●顔は好いが体の形は餘りよくないので僕は其單衣のままの上半身を一枚描いたのが今に残つて居るだけで裸体のは一枚も描いた事がない所で此女は口無しの物を言はぬばかりでなく頭も殆んど無能力で折々變な舉動もする餘り心持が好くないから一週間許りで返した其後は溜池の白馬會研究所で學生の爲にモデルを勤めて居たが程なく消息を聞かなくなつた●すると數年後の或る夏僕の邸を訪ねて來て物真似の上手な一人の女中を相手に手真似の身上話をして歸つた此女中の通譯に依ると本人は其後田舎の酌婦か何かになりそれから子を生んだといふと此時のツルは昔の面影もなく寡れ切つてヒステリー風の容貌であつたが今は巢鴨病院に狂美人の憐れを止めて居るとは我藝術家界に取つては大に同情を寄すべき事であらう

『中央新聞』明治四三年五月三〇日から六月二日にかけて連載された、ツルというモデルの女性をめぐるゴシップへのコメントである。同記事は因果の種を宿したツルが以前モデルをつとめたことのある黒田を頼って溜池の白馬会研究所に転がり込んだことを伝えており、閉口した黒田があたかも墮胎を勧めたかのような書きぶりは、さぞ黒田を刺激したと思われる。